

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

弔辞

著者	翁長 孝枝
雑誌名	沖縄文化研究
巻	31
ページ	260-262
発行年	2004-08-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015946

弔 辭

翁長 孝枝（元沖縄県教育長）

中村哲先生：こうして先生の御遺影の前に立ってお話申し上げるなんて、これまで考えたこともございませんでした。去る八月一〇日、先生がお亡くなりになったことを飯田泰三先生からの電話でお知らせいただきました。九一歳の天命を全うされ安らかに旅立たれたということでした。私が今日この場に立たしていただいていますのは、沖縄の地元紙「琉球新報」の日曜評論欄に「中村哲先生をしのぶ」という一文を掲載したことがきっかけで、大学の方からお招きをいただきました。先生はきっと高い所から「おやおや」というお顔をなさっておいでかも知れません。

私が先生のお宅にお伺いしたのは今からおよそ四五年ほど前の大学三年生の頃でした。当時私たち沖縄出身の学生は、祖国日本から切り離され、パスポートを持って渡航しなければならなかったうえ、あたかも異邦人のような心もとない立場に立たされ、祖国復帰以前の米国施政権下の特殊沖縄的事情を、重く引きずった学生時代を送っていました。夫の助裕が大学院で中村先生を指導教授に仰ぎ、勉学に励んでいて、私の方も法学部で先生の「政治学」を受講していました。

その頃の先生は四十代の半ば頃だったと思いますが、すでに美しい銀髪で、それが先生の柔和なお顔に実によくお似合いになっていらして、神々しい思いのする不思議な印象を受けたものでした。先生の頭髪が若い頃、台北帝大教授時代に最初の奥様を失った悲しみで、一夜にして銀髪に変わってしまったのだという噂を聞いて、その悲しみを痛む思いとともに、何ともロマンチックな想像力をかきたてられたものでした。

なぜこのことに触れたりするのかと申しますと、その後の永い年月、中村先生と親しくお会いする機会に恵まれ、深い敬愛の念で身近にお目にかかるとき、先生は永遠に純粹で、自由な魂をお持ちになったロマンチストだと思いをいつも抱くようになりました。

昭和三〇年代の沖縄は、祖国復帰への実現を県民の悲願として、精神的にも物質的にも負の状況に耐え抜くことを余儀なくされた厳しい時代の中になりました。心を満たされることの少ない青春の日々に、先生から私と夫は時にはお誘いのお声を掛けていただき、何と多くの勇氣と励ましをいただいたことでしょう。梅ヶ丘の先生のお宅をお訪ねすると、思いがけず春の陽だまりの庭で、汗ばみながら、庭の土を掘り起こしておいでで先生に出会ったりして、大学ではお目に掛かれない実に素朴であたたかい情景で、先生の汗に濡れたお顔を間近に拝見してうれしかったことを覚えています。ちょうどその頃、淑子夫人との幸せな家庭作りがスタートされたものではなかったのでしょうか。

中村先生の成城学園中等部時代のクラス担任が沖縄県久米島出身の著名な歴史家仲原善忠先生で、仲原先生との師弟関係が源流となって、先生の沖縄への深い思いにつながっていかれたのではないかと思います。

*

*

昭和四七年の沖縄復帰の年に、中村総長のお力で、法政大学に「沖縄文化研究所」が創設され、初代所長に御就任なされ、同研究所によって数多くの学者、研究者が久米島研究やその他の地域研究、民俗文化の研究等に優れた成果を生み出し、「沖縄学」の学問形成の場になったことは周知のことです。この功績で沖縄タイムス賞の特別功労賞を受賞なさって、沖縄県民に喜びと誇りを与えて下さいました。

先生は沖縄をこよなく愛され、沖縄ご訪問の時はいつも御連絡をいただき、私たち夫婦は先生をうれしくお迎えいたしました。特にフリータイムを見つけての半日スケッチ旅行に私はよくお供をさせていただきました。

先生は名の通ったアマチュア画家だと聞きおよんでいました。キャンバスに向かわれた時の本当に楽しそうな表情、

どんどん筆が運ばれるタッチの鮮やかさ、先生の目の届き方とか、言葉も発せず集中して楽しんでおいでの様子を眺めているのは、とても幸せな思いでした。スケッチに出掛けた途中、突然の雨に追われて駆け込んだ大衆食堂で雨上がりまでの短い時間に私を描いて下さった作品があります。中村先生に出会わなかったら決して描いていただけなかった私の大事な宝物として毎日眺めて暮らす喜びを感じています。

先生は、憲法・政治学者としてとして多大な業績を残されながらも、大学紛争時の騒然とした時代を一五年間にわたって総長職を務められ、大学の新生再建を果たす強さをお持ちになりました。

けれども私たちにとって懐かしいのは、先生の少年時代、柳田国男先生に私淑されたこともあって、終生傾倒された民俗学への愛着であります。例えば一つの壺、茶碗、一つの道具の型からお話は次から次へ世界の果てまで広がっていき、先生のお話に耳を傾けながら、わくわくする喜びに満たされたりいたしました。那覇市にある市場の片隅の郷土料理の店で、泡盛の古酒を味わいながら、私も熱をこめて沖縄の女性像やその特性について申しあげたりしていました。私にとって特別だった何とも眩しいような日々はもう還りません。

けれども中村哲先生は、私たちの胸の奥深く永遠に存在なさるお方だと今改めてその思いをかみしめています。

沖縄と深い交流をお持ちになった先生の御冥福を静かに祈り申しあげます。そして淑子夫人に心からの哀悼の意を捧げます。

中村哲先生、ありがとうございました。

教え子の一人として（二〇〇三年九月二三日） 於、「中村哲先生を偲ぶ会」